

---

 卷頭言

 「いのち」へのまなざし
 

---

 関西学院大学人間福祉学部人間科学科 藤井 美和
 

---

目に見えるモノの豊かさでは満たされない何かに気付いた現代人は、生きる意味や生き方の支柱として、物質的豊かさに代わるものを求め始めている。現代社会が「このころの時代」といわれるのは、そうした現象を表したものだだろう。近年のスピリチュアルブームは、このような何かを探し求める人たちの心をとらえ、マスメディアの後押しもあってサブカルチャーとしての位置を確立しつつあるといえる。

何のために生きるのか、人はなぜ死ぬのか、このような生死の本質的な問題は、古くから哲学や宗教が担ってきた。しかし現代この課題は、哲学や伝統的宗教が持つ枠組みではなく、よりプライベートな文脈からアプローチされるようになってきている。この新しい枠組みはいのちをめぐる議論において、スピリチュアリティという概念で説明されている。しかし近年日本で特に注目され、多くの人の心をとらえているのは、占いやチャネリングにみられるスピリチュアリズムである。このサブカルチャーとしてのスピリチュアリズムは、欧米でサイキックと表わされるものと類似した性質を有している。

一方、WHOが健康の定義改正に加えようとしているスピリチュアリティや、QOLの構成概念として考えられるスピリチュアリティは、サブカルチャーとしてのスピリチュアリズムとは明らかに異なっている。スピリチュアリティは、宗教性

を含むより広い概念とされ、人間存在を支える根源的領域であり、人間存在に意味を与える領域、また、世界・宇宙あるいは神との関係性の中での自身の存在を理解する根拠になるものとされている。ここでスピリチュアリティの定義や日本におけるスピリチュアリズムについての議論はしないが、いずれにしても現代人は、生き方の核になるものを探し求めており、それがスピリチュアルブームや、スピリチュアルな世界への関心の根底にあることは間違いない。

目に見えるモノや周りからの評価ではなく、生きる根拠として確かなものがほしい—そのような思いの背後には、物質的な豊かさや周りからの評価は確たるものではなく、むしろ崩れやすいものだという経験から得た学びがある。高度経済成長期、バブル経済を通して、私たちは自らの生き方を問い直す必要に迫られた。いつかは死ぬ存在として、この短い人生をどう生きるのか、現代社会は、今、この古くて新しい問題を私たちに突きつけているように思える。

一方で現代社会は、我々の個人的課題をこえて、「いのち」の在り方そのものを問うている。半世紀前の社会は、「人は生まれるときに生まれ、死ぬ時に死ぬものだ」という、自然の摂理を受け入れてきた。しかし科学技術の進歩により、今や「いのち」は、人間が操作するものとなり、何を生まれさせ何を死なせるかは、人間の判断によって行

われるようになったのである。国家政策としての優生思想は撤退し、代わりに個人の選好による新優生思想が台頭した。「いのち」の質には差があり、望まれる「いのち」は手に入れるが、いらない「いのち」は破棄する。はたして私たちは「いのち」の在り方について、どのような価値基準をもっているのだろうか。「いのち」の在り方についての議論は、生命倫理という形をとって現代社会に登場してきたのである。

これまで述べてきた、生き方の核を探し求めることと、「いのち」の在り方を考えることは、「個人 vs. 社会」という構図で捉えられがちである。しかし2つは対立するものではない。社会がもつ「いのち」の在り方（社会の「いのち観」）は、実は私たちの生き方の表明として構築されたものであり、逆に社会の持つ「いのち観」は、個人の問題として生きること死ぬことの意味決定に影響を及ぼす。しかし、どれほどの人が、このことに気付いているだろうか。生き方の問題はとりもなおさず、「いのち」の在り方の問題である。個人と社会の問題だと切り離し、無関心でいられる時代ではないことを、私たちは認識しなければならない。

「いのち」の在り方についての議論は、「私」のレベルから共同体としての「社会」のレベルまで幅広く多様である。そこにアプローチする新しい枠組みが死生学である。「いのち」についての多様な課題は、一つの学問体系によってのみ論じることができない。死生学は様々な学問を援用し、現代における生と死、「いのち」の課題に取り組む学際的学問である。したがって、人間存在そのものを問題とする哲学や宗教学といった形而上学はもとより、倫理学、社会福祉学、心理学、医学、精神医学、看護学、法学、教育学、文化人類学など、様々な学問背景から問題にアプローチする。

「いのち」の在り方を、生き方の問題かつ社会

の問題として捉えたとき、様々な現状が見えてくる。臓器移植、終末期医療、安楽死、代理母出産、出生前診断と選択的人工妊娠中絶、自殺、遺族ケア、児童虐待、高齢者や障害者へのかかわり……どれも私たちの社会において、私の問題として、あるいは身近な問題として直面するものばかりである。また近年は、経営学でも material vs. spiritual として、組織行動学やキャリアの精神性研究にスピリチュアリティが組み入れられるようになってきた。全人としての人間に焦点を当てるなら、生きる主体としての「いのち」そのものへのまなざしは、福祉や医療に特化したものでなく、政治経済を含むあらゆる社会活動において共通のものだといえる。

現代社会には、解決すべき多くの問題がある。その問題一つひとつに向き合うとき、私たちはそこにある「いのち」に目を向けているだろうか。「いのち」へのまなざしは、自分自身へのまなざしであり、身近な人へのまなざしであり、さらに共同体を構成する全ての人へのまなざしである。一人ひとりがそのようなまなざしを持てば、社会の問題を自分の問題として受け止め直すことができるのではないだろうか。

人間福祉学研究第3巻では、いのちをテーマとした特集「生と死を見つめ、支える」を企画し、4人の方に論文をお願いした。どれも「いのち」をめぐる様々な現代的課題について積極的なアプローチを試みた論文である。また投稿論文においても、人と社会の課題として人間の生をみつめる論文が寄せられた。

「いのち」にかかわる様々な現代的課題について、私たち自身がどのようなまなざしをもっているのか一本巻を、自身の「いのち観」を見つめていくきっかけとしていただければ幸いである。